

氏 名 岩 倉 具 忠
いわくらともただ
 学位の種類 文 学 博 士
 学位記番号 論 文 博 第 201 号
 学位授与の日付 昭 和 63 年 1 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 ダンテ研究
 —“eloquentia”をめぐる諸問題—

論文調査委員 (主 査)
 教 授 清 水 純 一 教 授 岡 道 男 教 授 中 川 久 定

論 文 内 容 の 要 旨

その一 “De vulgari eloquentia”の一考察

—「自己注解としての解釈の試み」—

『俗語詩論』は、みじかい論考であるにもかかわらず、内容が複雑で、一見統一に欠け錯綜した印象をあたえるというのが一般の見解のようである。その原因は全体で四巻にまとめられる予定であったこの著作が、二巻のなかばで中断されたために、著者の意図が十分に明かされなかったことに由来するというごく単純な説明が、従来くり返されて来た。しかしその理由は、それほど単純なものではないように思われる。

『俗語詩論』の複雑さは、「高貴な俗語」の探求を目的とする「俗語の表現法」についての論考という表層の意図とダンテの創作活動についての「自己注解」といういわば隠れた深層の意図との二重性から派生しているのではないかと推量される。本稿ではそのような作品のもつ二重性を読みとり、この著者とダンテの全著作との関係をできうるかぎり明らかにしたうえで、この著作の真の姿を浮き彫りにしようとした。

ダンテはこの著者において最高の詩形式であるカンツォーネに用うべき「高貴な俗語」を探求する。「高貴な俗語」とはどのような俗語であるかを明らかにするために、ダンテはまず人間の言語そのものの性質について吟味する。ダンテの言語観のなかでもっとも注目すべき点は、言語が歴史的・空間的に変化する実体として捉えられていることである。そしてこのことを「高貴な俗語」の探求のための重要な手掛とする。ダンテは言語の変化の原因を人間の「不安定で変わり易い」性質自体に由来すると考える。バベルの塔の崩壊したとき人間は、神から直接さずかったアダムの言語を失うことになるが、そのうち世界の言語は、各自「好き勝手につくり直された」と解釈する。ダンテはこの事実をもって言語は、人間の自由意志 (beneplacitum) により改変しうる有力な証左とした。人間には神からさずかった自然の「言語能力」がそなわっており、すべての人間は、すぐれた表現への潜在能力を有している。したがって言語改変の能力は、「高貴な俗語」の創造にとって有効な潜在的性向にほかならない。そこで詩人たるものは、俗

語の表現をできうるかぎり、ラテン語のそれに近づけ、可能態を現実態に引き出すことによって、「高貴な俗語」に到達すべく努力しなければならないとする。中世には言語の歴史的变化に着目した学者は、少なくなかったが、その変化の原因を人間の性状自体にもとめ、しかもそれをポジティブな性向と捉えたのは、ダンテの独創的見解であった。

こうした言語変化の理論を基盤としてダンテは具体的な言語の検討に移る。あらゆる俗語のなかでもっともラテン語に近いイタリア語には、この表現の潜在能力がもっともたかくそなわっているとしてイタリア諸方言を検討する。イタリアの方言を14に分類したうえで、各方言を吟味するが、そうした方言のなかには「高貴な俗語」を見出しえない。一方そうした探索の途上で、地方性を克服し、己れの方言から離脱することによって「高貴な俗語」を創出した詩人たちの名をあげていく。ダンテによれば人間には潜在的知性がそなわっているが、その現われ方には個人差がある。知的能力をつちかうには、ながい学問の習慣と努力が要求される。そのようにして選別の能力を獲得した詩人のみが、「高貴な俗語」を粗野な地方語かき選りすぐり、一種の文学的共通語を創造するにいたったのである。

しかし注意深くテキストの文脈を追っていくと、ダンテはそうした高貴な俗語の遣い手であるポジティブな詩人の系譜と地方性から脱却しえなかったネガティブな詩人の系列とを好妙に弁別している。その結果シチリア派からポローニャのグィニツェリ、グィニツェリからダンテ自身へと継承されていった輝かしい文学の伝統を浮き彫りにすることにより、自己の文学上の地位を確固たるものにしようとしている。一方ダンテ一派の栄光をくもらせる虞れのあるグィットーネー派をネガティブな系列に位置づけることによって自己防衛を試みている。

したがって、俗説によれば近代言語学の先駆的試みとして稱揚されるダンテの「方言学」の実態は、実は高貴な俗語、すなわちダンテ自身のイタリア語をひときわ輝かせるための舞台装置にすぎなかったことがわかる。それが証拠には、ダンテの引用した方言の実例を分析してみると、それらが当時流行した方言を嘲笑の対象とする「嘲笑詩」のジャンルに属するとみなしうる文例であることがつきとめられる。このようにして筆者は、テキストの深層に潜んだダンテの意図を明かすみに出すことができたと信ずる。

その二 『表現美の理論と応用』

前段においては『俗語詩論』から「表現法」の手引きという表向きの意図と「自己注解」という隠された意図の二重性を読みとることができたが、こうした二重性は、『俗語詩論』にかぎらず、多かれ少なかれすべての著作にみられる傾向なのである。しかも「自己注解」の作業は、つねに表現上の問題と微妙にからみ合っている。

なぜならダンテは自己の創作活動をたえず反省し、文学的伝統のなかに自己を位置づけようとする強い欲求を抱いており、この欲求によってすべての著作をある意味で「自己注解」の手段とする傾向があるのみならず、自己の創作に技巧上の反省を加え、創作と表現上の知見を結合させることによってたえず成長していった作家だったからである。この種の作家にあっては、「表現」が単なる技巧のレベルにとどまることはなく、つねに自己確認の手段としての意味をもっている。その結果ダンテのどの作品を繙いても、「表現」についての逡巡や苦慮や腐心の「告白」に満ちているのをわれわれは見出すことになる。ダンテ

は創作の過程でたえず「表現」の適性を自問したり、反省したりするばかりではなく、どのような動機により、どのような道程を経て、ある「表現」に到達したかを意識して読者に伝えようとすら試みる。また作品のなかで自己の「表現」の力量の不足や「表現」の困難性について言及している。こうしたダンテの表明は、ラテン中世が古典文学の伝統から継承した「謙譲のトポス」に属する修辞学上の一手法であることはわれわれも十分承知している。ダンテもまたそうした伝統を背景とした文学的土壌のうえに育ち、かつそうした手法を基盤としていることも否定しがたい事実である。それにもかかわらず同時代のどの作家よりも、ダンテが「表現」の問題に終生関心を示し続け、その作品のなかで頻繁にこの問題に言及していることも確かである。

ダンテが「表現」の問題を直接の対象として真向うから取り組んだのは、言うまでもなく『俗語詩論』においてであった。しかし『新生』から『神曲』にいたる各作品において、この問題に関する言及は随所に見出され、ダンテの関心がいかに深かったかが、うかがわれるのである。青年時代の創作である『新生』においてダンテは、すでに詩法と修辞学について並々ならぬ関心を示し、これらの問題について独創的な見解を述べている。また『俗語詩論』とほとんど並行して執筆された『饗宴』においては、『俗語詩論』で体系的に扱われた「表現」の芸術と手法についての考察にしばしば呼応する、きわめて示唆に富む意見の表明が見出される。のみならず『俗語詩論』では論じられなかった俗語の散文についての独創的な考えが、『饗宴』ではみごとに展開されている。『新生』から『神曲』にいたる各作品にあらわれた「表現美」についての見解は、時代を追ってますます深まり、尖鋭になり、高度なものになっていくが、基本的には、つねに一貫したものだと言えよう。筆者は、『俗語詩論』における「表現美」の理論を基底としながら、全著作を通じて散見される「表現」に関するダンテの所見から、ダンテの「表現美」の理論を復元し、その理論が、各作品において具体的にどのように適用され、実践されているかを詳細に検討した。

ダンテの「表現美」の理論の中心的課題は、「ふさわしさ」(convenientia)の美学でもある。すなわち思想的内容は、それに「ふさわしい」表現形式をもとめるものであり、その「ふさわしさ」は、個人に固有な資質にもとづくものでなければならない。ゆえに「文体」はすぐれて「個性的」なものであり、各人の才能と努力に応じて完成されるべきものである。詩人が完べきな表現にいたる道は、この上もなく険しく、「努力と労苦」が必要とされるとともに、「才能」と「技巧」と「学問」が不可欠な要素である。したがってダンテが「ふさわしさ」の美学で何よりも強調したかったのは、「形式」と「内容」の調和という問題であった。中世の伝統では、「形式」はあくまでも皮相的な「装飾」にすぎなかったのに反し、ダンテの場合「形式」は自己の個性の発現の手段にほかならない。ダンテは、言語活動の目的を「心に抱くところを他人に明かすこと」であるとす。そしてコミュニケーションにおいては、「理解すること」より「理解させること」の方がより重要であり、より人間的であるとす。この観点に立って言語のもつ表現力、すなわち人の心を動かす言語のもつ「力」が強調されることになる。ダンテは青年時代の詩作活動や政治のための「弁論術」の体験からこうした「ことば」への信仰をはぐくむことになった。

それにもかかわらず一方ではダンテの言語思想の根底に「言語の非伝達性」という「ことばの限界」に対する明確な意識があったことも否定し難い事実である。

筆者はダンテの著作のテキストを味読することにより、解釈上のいくつかの新しい提案をなした。

『新生』の第25章は、従来本論からの一種の「逸脱」と解されてきたが、この章のふくむ重要な問題を読み解くことにより、ダンテの文学理論の基本的な考え方を明らかにするとともにギットーネー派に対する攻撃という例の自己防衛の姿勢を浮き上がらせ、25章がむしろ「詩論」としての『新生』の中核をなす重要な章であることを証明した。また『饗宴』におけるダンテの弁明、すなわちラテン語ではなく、俗語で執筆することについての弁解のうちに、従来考えられていたような単なる「受け身」の防衛的姿勢ではなく、むしろ積極的な俗語の「擁護と顕揚」の主張を読みとることに成功した。加うるにダンテの知識人としての役割と俗語の擁護が密接な関連をもつことをも明らかにした。すなわちダンテは、自身を学問の世界と非学識者 (illitterati) との仲介者と位置づけ、啓蒙のための強力な武器として俗語を肯定しているのである。したがってダンテの俗語擁護の態度は、きわめて鮮明であり、いわば政治的ですからある。

その三 「リアリズムの手法」

この試論においては、ベアトリーチェの叱責を受けた例の過去の「迷い」の一時期にあたる1293年から1297年にかけて創作されたと推定しうるフォレーゼとの「口論詩」および「石の詩」を扱っている。これらの詩の創作の時期は、ダンテの生涯において、その人間形成にとって決定的ともいえる重要な意義をもつ。ベアトリーチェの死の悲しみから立ち直った詩人は、哲学の勉強に打ち込み、政治活動に参画し、きわめて活動的になる。こうした現実の体験の深化が、創作の「表現」に反映し、従来とは異質の新らしい「詩法」が生まれたと考えられる。その意味で後年追放後に、詩人の味わった深い人生経験が、『神曲』の表現美となって結晶した状況と一脈通ずるところがある。現にフォレーゼとの「口論詩」と「石の詩」の詩作には、『神曲』、とりわけ『地獄篇』の文体を予示するようなリアリスティックな手法が随所に見出されるのである。

ここで特に強調したかったのは、ダンテが単に技巧上の実験として文体の彫琢に取り組んだことはまれであり、新しい手法の背後にはつねにそれに対応する人生上の体験があったという点である。換言すればこれらの作品にみられるリアリスティックな「表現」の動機が、ダンテの実生活上の体験と密接な関係を有するという点である。筆者はこの試論によって、ダンテの人生体験の深化が、表現手段の可能性の増大につながるという詩人のもっとも重要な特徴の一つを浮き彫りにしたかったのである。

論文審査の結果の要旨

ダンテに関する研究書は、文字通り、汗牛充棟の状況にあるが、そのなかにあって、本論文「ダンテ研究」—“eloquentia”をめぐる諸問題—は、ユニークな解釈を呈出している。それはダンテの全著作を一貫して二つの基調が流れているとする、著者独自の洞察に根ざすものである。即ち、その一つは、ダンテはたえず自己の作品を文学史の流れの中に位置づけようとする欲求に駆られつづけた作家であったと見る、いわばダンテの意識の深層には、「自己注解」ともいべき隠れた意図があったという指摘であり、もう一つは、ダンテは「表現」にたいして並々ならぬ関心と努力を払いつづけた作家であり、ここから独自の「表現美」の理論と実践とが生れたとする立論である。

本論文は、Vita Nuova (新生)、De Vulgari Eloquentia (俗語詩論)、Il Convivio (饗宴)、Rime

(詩集)、La Divina Commedia (神曲) などのダンテ主要著作を参照しながら、主として上記の二提題を検討し、その特質と展開とを究明したもので、所論をたえず原典に立戻って検証しようとする著者の姿勢は、全論文を通じて一貫している。

ところで、これらの問題に著者が自覚的に取り組みはじめたのは、「俗語詩論」解説中のことであったとされるが、これをさらに遡源すれば、本論文に先立って刊行された「俗語詩論」注解(副論文として呈出された)にまで到りつく。そこでは、De Vulgari Eloquentiaの校訂版を新しい作成し、邦語訳注を付して出版することが、著者の意図であったのだが、その作業を進める間に、従来とられてきた多くの解釈のいずれにたいしても飽き足らなさを覚えるに到った事情が語られている。その一つが、「高貴な俗語」の探求を目的とするという「俗語詩論」創作の表層の意図に対して、作者の「自己注解」という深層の意図が隠されているのではないか、という疑問である。そしてこのような表層と深層という二重の意図から「俗語詩論」を新しく解明する手掛を得たばかりでなく、その問題がダンテのその後の諸作品にも一貫して流れていることに想到したという。

“De Vulgari Eloquentia”の一考察、と題された本論文の第一部は、ここから出発した「自己注解」としての「俗語詩論」解釈の試みである。著者はとくに同書第一巻第九章、第十章の綿密な検討から始めて、ダンテ「方言学」の実体に迫り、従来ともすれば、はじめてイタリア語方言を追及した研究としての先駆的価値のみが評価されがちであった「俗語詩論」に、新しい解釈をもたらした。さらに「自己注解」というこの隠れた意図が、「新生」や「饗宴」などの他の作品にも共通することを明らかにして、むしろこの「確固とした歴史的視座のもとに自己の体験の意味を普遍化」しようとした能力のうちに、ダンテの独創性が見られるとする。この指摘は新鮮で示唆的であり、これに関連する少なからぬ諸問題、たとえば、なぜダンテが同じフィレンツェ派に属するグィットーネをあれほどまでに敵視したか、といった疑問を説明するにも、極めて有効である。

第二部「表現美の理論と応用」は、「俗語詩論」のもう一つの重要な目的である、「高貴な俗語」の探求という表向きのテーマに直結するところの、「俗語の表現法」についての考察である。著者はここでダンテの言語観の検討から出発して、「表現」の問題がダンテの生涯を通ずる重大関心事であったことを明らかにし、全著作中に散見される「表現」に関する所見を比較吟味することを通じて、「表現美」の理論を復元してみせる。即ち、「表現美」理論とは *convenientia* 「ふさわしさ」の美学、つまり「形式」と「内容」との調和という問題であり、中世の伝統では皮相な「装飾」にすぎなかった「形式」を、自己の個性発現の手段にまで高めたとする。そしてその応用例が「新生」にすでに見られることを明らかにし、つづいて「神曲」に到るまでの諸作品の中で、時代を追うてますます深まり、鋭化し、高度化するプロセスとして解明する。

第三部「リアリズムの手法」は上記のプロセスを、「フォレーゼとの *tenzone* (口論詩)」と「*rime petrose* (石の詩)」とよばれる詩を分析することによって、解明したものである。即ち、こよらの詩はリアリズムの文体で記されているが、この文体は「新生」から「神曲」へと進む一時期にダンテが好んで用いた手法であるという。筆者はそれらの詩を一つ一つとりあげて、懇切な注解を加えながら所論を展開しているが、ここでとくに強調されているのは、ダンテの新しい手法の採択には、それに対応する人生上の

体験があったとする点である。つまりダンテにとって、「表現」は単なる技巧のレベルにとどまることなく、自己実現の手段としての意味をもっていたことが改めて主張され、「ダンテの人生体験の深化が、表現手段の可能性の増大につながる」という、筆者の考えるダンテ文学の重要な特徴が浮き彫りにされる。

本論文は、全体を通じて、その叙述が明晰且つ堅実に進められており、新旧の関連研究書類にも周到な目配りがされている。しかもそれらが原典の忠実的確な読みに裏づけられていて、説得的である。もっとも研究対象の関連する領域は極めて巾広く且つ奥深いため、個々の説明にはさらに懇切な補説が望ましい部分も残されている。たとえば、ダンテの表現力（ことば）の限界について言及されているところでは、中世文学的「謙讓トポス」とも較べて考察されてはいるが、より一歩進んだ両者の比較検討が望まれるし、ラテン語と俗語との評価、とくに俗語の重視へと傾いたとされるダンテの態度についても、さらに立入った検討がなされていたら、一層興味を増したであろう。とくに人生体験と表現との問題に関連して、彼の政治体験、またその表現欲との関係について言及されることの少なかった点は、遺憾である。しかしこれらの欠点も、本論文が全体として保つ積極的主旨を毫も損なうものではない。本論文の学的貢献、とくにダンテについての本格的研究に乏しい我が国の学界に対する貢献度は、高く評価されるべきであろう。

以上審査したところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。

昭和62年10月28日、調査委員三名が試験を行った結果、合格と認めた。